

木造南無佛太子像

元興寺の仏像コレクションには、日本仏教成立の中心人物である聖徳太子（572-622）の像が2体含まれている。聖徳太子は推古天皇（592-628）の甥として生まれ、593年に推古天皇から摂政に任命された。翌年、推古天皇は聖徳太子の提案で、仏教を奨励する勅令を發布した。このような庇護は、元興寺の前身である法興寺の創建につながり、日本における仏教の確立に欠かせないものとなった。

聖徳太子は、自らも熱心な仏教徒であり、主要な仏典の注釈書を3冊出版したと記録されている。その後、聖徳太子は政治家としてではなく、崇拜の対象として扱われるようになった。智慧と徳の王子を意味する聖徳太子の名は、彼の死後に付けられたものである。

聖徳太子は、また、仏教説話の中では、聖人として、あるいは阿弥陀仏や釈迦仏の顕現として描かれる。また、阿弥陀の浄土に最初に生まれ変わった人物とも言われている。このような聖徳太子の神聖化により、彼を神聖な人物として描いたこれらのような像が作られた。これらの像は、以前は聖徳太子を祀るための特別なお堂である太子堂に安置されていたものである。15世紀、元興寺は「奈良の太子堂」と呼ばれるほど、太子信仰の中心的存在であった。1859年の火災で堂は消失したが、2体の像は保存された。両像は重要文化財に指定されている。

聖徳太子十六歳像（1268年）

この像は、病気の父のために祈る聖徳太子の姿を描いたもので、儒教的な親孝行の精神が強く表れている。

聖徳太子の髪型は、中央の髪を両脇に寄せたものである。これは8世紀の貴族階級の男性がよくしていた「みずら」と呼ばれる髪型である。また、聖徳太子は、性がよくしていた「みずら」と呼ばれる髪型である。聖徳太子は、宮中の真紅の袍の上に、七條袈裟と横被を羽織った法衣を着ている。そして左手で横被のひだを上げ、右手には仏式の香炉を持っている。

この像は、その体内に残された資料から、聖徳太子の生誕650年を記念して作られ、5000人もの人々がそのための寄付を行ったと考えられている。

聖徳太子一歳像（13世紀）

この像は、聖徳太子が幼少の頃に両手を合わせて祈っている姿である。このポーズは、釈迦の命日である二月十五日に起こったとされる出来事にちなんだものである。幼い聖徳太子は、乳母の手を逃れ、東を向いて南無仏を唱えたという。聖徳太子のある伝記によると、7歳までこの行為を続けたという。この時、合掌した手の間からお釈迦様の左目の遺物（舍利）が現れたとされ、法隆寺の舍利殿に納められているという。

この瞬間を描いた像は、12～13世紀にかけて特に人気があった。この像は、子供のような顔立ちでありながら、敬虔な姿勢と強いまなざしが、幼い王子の類まれな知恵を強く印象づけている。